

『枕草子』の「普通でない」を意味する 言葉について

土屋 博 映

一、はじめに

『枕草子』には善を示す言葉が多いことは周知の事実である。また、その反対の、醜を表現する言葉も多い。これらについては、拙稿でその位置づけを確認してきた。

ところで、『枕草子』において、善でも悪でもない「普通」という気持ちを表す言葉にはどのようなものがあり、どのように位置づけられているのだろうか。実はこの「普通」という意味に興味を抱いたのは、「普通でない」という意味を表す表現が頻出することから、「普通でない」はどのような価値を持つのだろうかという疑問を抱いたからなのである。そこで、本稿では、「普通でない」を意味する言葉に注目し、そこから「普通」について知るきっかけとしてみたい。では、「普通でない」を意味する言葉をあげてみよう。

1 れいならず

- 2 なめならず
- 3 なべてならず
- 4 ただならず
- 5 おろかならず

これら「普通でない」を意味する言葉は、それぞれどのような関係にあり、また善や悪を意味する言葉とどのような関係にあるのだろうか。「ならず」のない形を基本として、そこから「ならず」のついた表現を考えていきたい。

二、れい(例)

まず「例」として、名詞で用いられる例を検討してみる。

① 例

1 七日、雪間の若菜つみ、青やかにて、例はさしもさるもの目
近からぬ所に、もて騒ぎたるこそをかしけれ。(三段「正月一日は」)

これは、正月七日の行事で、普段はそんな若菜など注目しない、というところで用いられている。晴れやかな行事に対して、「普段・普通」という「例」である。

2 例いとよく書く人も、あぢきなうみなつつまれて、書きけがしなどしたるあり。(二三段「清涼殿の丑寅の隅の」)

これは、中宮により、突然和歌を書くことを命じられた、という部分である。中宮という高貴な方が関わるということに対して、「普段・普通」という「例」である。

3 俄にわづらふ人のあるに、駿者もとむるに、例ある所にはなくて、ほかに尋ねありくほど、(二八段「にくきもの」)

これは、急病人が出てあわてて駿者を探す、という文脈で用いられている。急病人が出たという緊急事態に対して、「普通・いつも」という「例」である。

4 すこし老いて、物の例知り、おもなきさまなるも、いとつきづきしくめやすし。(四七段「主殿司こそ」)

これは、年をとって、物事のしきたり・先例を知っている、という部分である。「しきたり・先例」という意味の「例」である。

5 「進上餅餠一包 例に依って進上如件」(二三三段「頭の弁の御もとに」)

これは、立文に書かれたもので、漢文で記されている中に用いられたもの。これも、4と同じく、「しきたり・先例」という意味である。

6 御返り参らせて、少しほど経て参りたる、いかがと例よりはつつましくて、御几帳にはた隠れてさぶらふを、(一四三段「殿などの」)

これは、作者がひさしぶりに中宮の前に参上した時のこと、ひさしぶりの参上で、あらたまった気分に対して、「普通・いつも」という「例」である。

7 七夕祭、ここにては例よりも近う見ゆるは、ほどの狭ければなめり。(二六一「故殿の御服の頃」)

これは、七夕祭の時。場所が狭い所にいるので、近く見えるというのである。つまり、場所が狭いことに対して、「普通・いつも」という「例」である。

8 「いといとほしきわざかな。例もかうや悩み給ふ」など、事なしびに言ふもあり。(一九〇段「八月ばかりに」)

これは、病気にかかった人に話しかけている文脈に用いられている。この病気に対して、健康であること、つまり、「普段・普通」の意味の「例」である。

9 しありくさまの、例知り、いささか主に物言はせぬこそうらやましけれ(三〇〇段「陰陽師のもとなる」)

これは、陰陽師の所にいる少年がものをよく知っている場面である。したがって、「しきたり・慣例」の意味の「例」である。

ここまでの「例」9例で言えることは、「例」は、ごく一般的に「普通」の意味で用いられているということである。また、「慣例・

しきたり」の意味で使われることがあることが特徴である。

次に、「例の」形で用いられる例を検討する。

② 例の

10 びらうげの車などは、門小さければ、障りてえ入らねば、例の筵道敷きておるに（八段「大進生昌が家に」）

これは、車が、門が小さくて入らない場合、「いつものように」の意味で使われている。「普段・普通」ともとれるが、「慣例」とも考えられる。これは慣用表現である。

11 「姫宮の御前の物は、例のやうにては、にくげにさぶらはむ。ちうせい折敷に、ちうせい高坏などこそよく侍らめ」（八段「大進生昌が家に」）

これは、姫宮の御前に置かれるものについて、使われている。これも「普段・普通・いつも」としてよいのだが、「いつものならわし」ともとれる。「例の」とあるが、後に「やう」とあるので、これは連体修飾をしていて「いつものように」という連用修飾ではない。しかし、本質的には「例のやうに」となっているので、連用修飾と同じ気持ちで作者は用いていると考えられる。

12 「なほ例の人のやうに、これかくな言ひ笑ひそ。」（八段「大進生昌が家に」）

これは、人を笑う場面。「例の」の形だが、後に「人」とあるので12と同様、連体修飾である。「例の人」で、「そこらへんにいる人」、「世間一般の人」といった意味になる。慣用的な「例の」とは、異

なり、「例の」の形をしているが、「例」（名詞）プラス「の」（動詞）と分かれる要素が強い。

13 耳をとなへて聞くに、知る人の名のあるは、ふと例の胸つぶらむかし。（五六段「殿上の名対面こそ」）

これは、殿上の名対面という晴れの場面で使われている。「いつものように」という慣用表現と考えてよい。

14 これはいとづかしげに思ひてあはれなれば、例の、衣一つ賜はせたるを、伏し拝むは、されどよし、（八七段「職の御曹司に」）
これは、尼である乞食に、中宮がものを与える場面。連用修飾で、「いつものように」の意味である。

15 「さらば、取りおろして。例の、這臥しにならばせ給へる御前たちなれば」とて、まかなひ騒ぐほどに、（五月の御精進のほど）
これは、食事の場面にもちいられている。連用修飾で、「いつものように」の意味である。

16 「御使にて、式部の丞信経参りたり。例のごと褥さし出でたるを、常よりも遠くおしやりて居たれば、」（一〇三段「雨のうちはへ降るころ」）

これは、使者がやって来た場面、使者が訪れた時は、返事ができるまで「褥」に座り、待つのが習慣・ならわし。これは「いつもの」でよいのだが、「しきたり」のニュアンスも含まれている。「例の」の後に「ごと」があるので「いつもの」と連体修飾なのだが、意味的には「いつものように」ととらえておいてよい例である。

17 めでたき御有様を、うち笑みつつ、例のたはぶれ言せさせ給ふ。(一〇四段)「淑景舎、東宮に参り」

これは、中宮のところへやって来た関白藤原道隆が、冗談を言う場面。連体修飾で、「いつものように」である。

18 大夫殿の居させ給へるを、かへすがへす聞ゆれば、例の思ひ人と笑はせ給ひし、(二二九段)「関白殿、黒戸より出で」

これは、大夫藤原道長を、作者がほめたたえることに對して、中宮がからかうところ。「例の」は、連対修飾で、「いつもの、あの」といった意味で用いられる。現代語に近い用法である。

19 例の女のやうにや言はむとこそ思ひつれ(一三六段)「頭の弁の職に」

これは、作者の詠んだ和歌が賞賛された部分である。連体修飾で、「普通の・一般の」といった意味で用いられている。

20 例のところならぬ所にて、ことにまたいちぢるしからぬ人の声聞きつけたるはことわり、(一五〇段)「胸つぶるるもの」

これは、いつもと違った場所で、誰の声かはっきりしない人の声を耳にした場面。連体修飾で、「普通の・いつもの」の意味である。

21 例のやうに格子などもなく、めぐりて御簾ばかりをぞ掛けたる、なかなか珍しくてをかしければ、(一六一)段「故殿の御服の頃」

これは、中宮の仮御所での話。御所と異なり、格子がなく、御簾だけをかけている状態がかえって珍しく趣があるという文脈である。連体修飾で、「普通の、いつもの」の意味である。後に「やう

に」とあるので、心持ちとしては「いつものように」といったところである。

22 鼓の音も例のには似ずぞ聞ゆるを、ゆかしがりて(一六一)段「故殿の御服の頃」

これは、鼓の音がすばらしいこと。21と同じ場面である。ただし、この「例の」の「の」は準体助詞で、「普通の鼓の音」として使われている。

23 御前近くは、例の炭櫃に火こちたくおこして、それにはわざと人も居ず。(一八四段)「宮にはじめて参りたる頃」

これは、作者が初めて中宮の前に参上した場面。炭櫃に火をおこしているのである。それに対して「例の」は用いられている。「普通・普通」の意味である。

24 宵うち過ぐるほどに、忍びやかに門たたく音のすれば、例の心知りの人来て、けしきばみ、立ちつくし、(一九三段)「南ならずは東の」

これは、夏の宵の情景である。男が訪れ、それに対して、事情をよく心得た女が迎えるといった場面。連体修飾として、「例の」は「人」にかかるとも見られるが、「いつものように」とするのが無難であろう。

25 また、さらに人え見知らず。例の、中将来て問へば、「二つを並べて、尾の方にほそきすばえをしてさし寄せんに」(二四四段)「蟻通しの明神」

これは、難問を与えられた中将が年とった親のところにとびたび来ては、解決してもらおうという場面。連用修飾で、「いつものように」の意味である。

26 「例」の、君の「など、にくまる。(二七八段「関白殿、二月二十一日に」)

これは、女房が隠し立てをする場面。非難されているのである。連用修飾で、「いつものように」の意味。

27 御供に例」の四位、五位、いと多かり。(二七八段「関白殿、二月二十一日に」)

これは、大納言伊周の長男のお供に殿上人が付き従う場面。連用修飾で「いつものように」の意味である。

28 つとめて、例」の廂に人のもの言ふを聞けば、(二九二段「成信の中將の」)

これは、「廂」のところで人が話をしているのを聞いている場面。この前の箇所にも廂で話すところがある。「ほら、あの、先程の」といった意味で、現代語の用法に近い。

29 柳といひて、例」のやうになまめかしうはあらず、(三〇一段「三月ばかり物忌しに」)

これは、柳についてである。「普通の・木一般の」といった意味でつかわれている。連用修飾だが、後に「やうに」とあるので、心待ちとしては「いつものように」と同じと考えられる。

30 例」の、夜いたく更けぬれば、(三一三段「大納言殿参り給ひ

て」)

これは、大納言伊周がやって来て夜がふけた場面。やって来れば必ず夜更かしをするのである。連用修飾で「いつものように」の意味として用いられている。

31 尊かりて集まりたるも、例」の心ならば、いかにはづかしと惑はむ。(一本二三段「松の木立、高き所の東」)

これは、よりましと成って精神状態が神がかり(仏がかり)となつた者に使われている。連体修飾で、「普通の・普段の」といった意味である。

32 牛飼童、例」のしもじよりも強く言ひて、いたう走打つも、あなうたてと、(二本二九段「女房の参りまかで」)

これは、借りた車の牛を使う男が鞭を使う様子である。普段の牛を使う男よりも乱暴なのである。連体修飾で、「普通の・いつもの」という意味である。

「例」は「いつものように」の意味で、慣用表現として用いられることが、連体修飾の場合ももちろんある。いずれにせよ、「例」は、「普通・普段」の意味で使われることがほとんどである。中で、「しきたり・慣例」の場合があつたが、「例」がより格式をもつて用いられると(そういった文脈で用いられると)、そのような意味になると考える。

次に、「例ならず」という形を見て行く。

③ 「例ならず」

33 古今を^{持て}わたらせ給ひて、御几帳を引きへだてさせ給ひければ、女御、例ならずあやし、とおほしけるに、(二四段「清涼殿の丑寅の隅の」)

これは、村上天皇が、女御にむかつて古今和歌集の試験をしようとかわだてているところ。天皇が、「普通と違った態度で」おかしい、というのである。「あやし」と関連して用いられている。「あやし」に続いて「普段と違う」という意味であつて、「はなはだしく」ではない。

34 例ならずぬ人の前に、子負ひて出来たる。(一〇九段「見苦しきもの」)

これは、身分の高い人の前に、子供をおぶつて出て来たのが見苦しいという文脈で用いられている。「例ならずぬ」は、「普通でない」の意味だが、ここでは善で、「高貴な」に近い意味である。

35 かやうにて、寺にも籠り、すべて例ならずぬ所に、ただ使ふ人の限してあるこそ、甲斐なうおほゆれ。(一一〇段「正月に寺に籠りたるは」)

これは、寺に籠もつたり、いつもと違う場所で召し使いただけといふのはつまらないという文脈である。「例」は、「普通・普段」という意味である。

36 「女房やさぶらひ給ふ」と、声々して言へば、「出でて見よ。例ならず言ふは誰ぞとよ」と仰せらるれば、(一三七段「五月ばかり、月も」)

これは、月もなく暗い夜に男たちが女房のところに行って来た場面である。声をそろえて女房を呼ぶことなどめつたにないのである。つまり、男たちの声が「普通でない」という意味である。

37 例ならず仰言などもなくて日頃になれば、心細くてうちながむるほどに、(一四三段「殿などのおはしまさで後」)

これは、作者が実家に帰っている折、いつもなら中宮のお言葉があるのに、それが無い、という文脈である。中宮に「普通でない」と用いられている。

38 親などの心地あしとて、例ならずぬけしきなる。(一五〇段「胸つぶるるもの」)

これは、親などが具合が悪いことに使われている。「例ならずぬ」は「普通でない」のだが、悪に関わる表現である。

39 雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子参りて、炭櫃に火おこして(二九九段「雪のいと高う降りたるを」)

雪が深くつもつた場面。そういう時には、格子をあげてながめるものなのに、おろしている。つまり、「普通でない」、という用法である。

「例ならず」は「普通でない」という意味で使われることが多かった。善・悪を意味すると見られる例もあるが、単に「いつもと違う」ニュアンスである場合がほとんどである。

こうして見てくると、「例」はとくに個性的な強い意味のない、俗な言葉で言えば、くせのない「普通」の意味であるようで、もつ

とも一般的な「普通」の意味を表す言葉と言えよう。したがって「例ならず」も、もったも一般的な「普通でない」意味を表す表現と言えるのである。

三 な の め

次は、「な の め」に関し、見て行くことにする。「な の め」は2例のみ存在する。

40 な の めにだにあらす、そこらの人のほめ感じて、(八二段「頭の中符の、すずろなる」)

これは、作者について、殿上人たちがこの上なくほめそやした場面である。ほめることに対して「普通でさえなく」と強調している。

41 世をな の めに書き流したる言葉のにくきこと。(二六二段「文言業なめき人こそいとにくけれ」)

これは、手紙の用語の無礼な人について、用いられている。これは「いいかげんに」の意味である。

「な の め」はたった2例である。作者にとっては使い慣れた言葉ではないようだ。また「な の めならず」の例は存在しないが、40の例は「な の め」を否定した表現としてつかわれている。41の例を見ると、「普通」というよりは「いいかげん」の意味であり、40の例もそういう点からみると、「ほめ感じて」いることを「例ならず」などよりは強く強調しているようにも見受けられる。「例」よりも個性的で強さのある言葉と言えよう。

四 なべて

次に「なべて」について、見て行く。

42 なべての月には見えぬものの、師走のつごもりのみ時めきて(四〇段「花の木ならぬは」)

これは、「ゆづり葉」が師走にのみ見られるという文脈で使われている。「なべて」は、月一般をさす。「普通・一般」の意味である。

43 あまりうるさくもあれば、このたび出でたる所をば、いづくとなべてには知らせず。(八四段「里にまかでたるに」)

これは、作者が出掛けたところを特別の人にしか知らせず、隠している場面。「なべて」は、「人一般」をさす。「普通・一般」の意味である。

44 内裏は、五節の頃こそ、すずろにただなべて、見ゆる人もをかしようおほゆれ。(九二段「内裏は」)

これは、五節の頃の宮中のはなやかな場面である。「世間一般」の意味でもちいられている。

45 「たが教を聞きて、人のなべて知るべうもあらぬことをば言ふぞ」(三七段「五月ばかり」)

これは、作者が漢詩を知っていたことに対しての驚きの表現。「なべて」は、「普通・一般」の意味である。

46 ものの色などは、さらになべてのに似るべきやうもなし。(二七八段「関白殿、二月二十一日に」)

これは、中宮の美しき、特に身につけた装束に関わる。着物が普通・一般のものとは似るはずがないというのである。「なべて」は、「普通・一般」の意味。

「なのめ」同様に「なべて」にも「なのめならず」の例がない。「世間一般」の意味として用いられる傾向にあることが特徴である。この「なべて」は本当の意味で、「例」や「なのめ」で置き換えることは出来ない。ニュアンスとしては「対象となるものを除外した他のものすべて」といったところだからである。

五 ただ

ここでは、「ただ」について見て行く。

47 ただに来たりしは、なかなかよかりき。(八二段「頭の中將のすずるなる」)

これは、使いが何も持たないで、やって来たのがかえってよかつたという作者の感想である。「ただに」は、「何もない」の意味である。

48 まして、女も、ただに言ひかはすことは、ときところはと思ふほどに、あいにくひがごともあるぞかし。(一六〇段「心もとなきもの」)

これは、女の場合でも、普通の手紙のやりとりでは、早いのがよい、という文脈である。「ただに」は、「普通・通常・普段」といった意味にとれる。

49 御文はなし。ただなるやうあらむやはとて御覧すれば、(八七段「職の御曹司に」)

これは、お手紙がないので、まさかそんなことはないだろう、という文脈である。「ただなる」は、「何もない」の意味で用いられている。

50 これは、ただなる折のことなめり。正月などはただいと騒がしき、(一一〇段「正月に寺に」)

これは、正月に対比して用いられている。正月というはなやかな時に対し、「普通・普段」の意味である。

51 ただなる所には目にもとまるまじきに、これが身にただ今ならばやとおほえしか。(一五八段「うらやましげなるもの」)

これは、稲荷詣りで出会った女に対し、うらやましく思ったというのである。稲荷という特別な場所に対して、「ただなる所」ともちいられている。つまり、「普通・一般」の意味である。

52 女の限しては、さもえ居明かさざらましを、ただなるよりはをかしう、好きたる有様など言合せたり。(一八一段「雪のいと高うはあらで」)

これは、男がやって来たので、女だけでいるよりは楽しく夜を過ごせたという場面。女だけ、つまり「普通」の意味である。

53 男車の誰とも知らぬが後に引統きて来るも、ただなるよりはをかしきに、(二二二段「祭りのかへさ」)

これは、「祭りのかへさ」で、男車の誰ともわからないのが後ろ

からついてくるのがいつもよりもおもしろい、というのである。つまり、「普通・いつも」の意味である。

54 小兵衛といふが、赤紐の解けたるを、「これ結ばばや」と言へば、実方の中将寄りてつくろふに、ただならず。(九〇段「宮の五節出ださせ給ふに」)

これは、実方の態度について言っている。この後に実方は、和歌を詠みかけるのである。つまり、何か意味ありげだということ、「普通でない」、として使われている。

55 ことにたのもしき人もなき宮仕人などを語らひて、ただならずなりぬる有様などをも知らでやみぬるよ。(一二四段「はづかしきもの」)

これは、ちゃんとした交際する男性もない女性とつきあい、妊娠させてしまった男の話である。妊娠を「ただならず」と表現している。つまり、「普通でない」、意味である。

「ただ」は9例、そのうち「ただならず」は2例である。「ただ」は形容動詞であり、名詞である「例」とは品詞が異なるのであるが、意味的には「例」に非常に近いところが見受けられる。ただし、「ただ」には「何もない」といった例があるように、「ただならず」の2例は、「例ならず」と同じ「普通でない」と一応訳せたとしても、その意味するところは「例ならず」よりも強く、个性的である。

六 おろか

最後に「おろか」について見て行くことにする。

56 一ふしあはれともをかしとも聞きおきつるものは、草、木、鳥、虫もおろかにこそおほえね。(四〇段「花の木ならぬは」)

これは、何か一点「あはれ」とか「をかし」とか聞きとめたものは草や木など、何でもいいかげんには思われぬ、というのである。「おろかにこそおほえね」で、賞賛の言葉となっているので、「おろか」自体は、否定的な意味と考えられる。「普通」というよりは、「いいかげん」といったところであろう。

57 いと宮仕おろかにさぶらふこと。宿直所をだに賜りたらば、いみじうまめにさぶらひなむ。(一六二段「弘徽殿とは」)

これは、中宮職にやって来た中宮に対して、担当の源中将が挨拶する場面。「宮仕」とは、彼の仕事ぶり、謙遜して「おろかに」と言っている。「いいかげん」の意味である。

58 返す返すもすさまじきといふはおろかなり。(二五段「すさまじきもの」)

これは、「すさまじき」という言葉を強調したところで用いられている。つまり、「すさまじき」などというものではない、といった内容である。「いいかげん」という意味がもとなのだが、「いふはおろかなり」で慣用表現ととらえたほうがよい。

59 聞もまたをかし。有明、はた言ふもおろかなり。(三六段

「七月ばかりいみじう」

これは、七月の月のない闇夜も趣深いし、有明の月の時はなおさら趣深いという文脈で用いられている。「言ふもおろかなり」で、「言うまでもない」という慣用表現である。

60 人麻呂がよみけむ程など思ふに、言ふもおろかなり。(三八八段「池は」)

これは、猿沢の池について述べた部分。この一文の前に、猿沢の池について「めでたし」と評価しており、「言ふもおろかなり」は、それ以上だという「めでたし」よりも上の評価する言葉として用いられている。「言うまでもない」という慣用表現である。

61 六月になりぬれば、音もせずなりぬる、すべて言ふもおろかなり。(四一段「鳥は」)

これは、ほととぎすについて、賞賛している部分。この一文の前に、ほととぎすについて、「いみじう心あくがれ、せんかたなし。」という表現があり、それ以上のほめ言葉として「言ふもおろかなり」は用いられている。「言うまでもない」という慣用表現である。

62 博士の才あるは、いとめでたしと言ふもおろかなり。(八八八段「めでたきもの」)

これは、「めでたきもの」という段の中で用いられている。「言ふもおろかなり」は、その「めでたし」を強調するために使われている。「言うまでもない」という慣用表現である。

63 まして、情あり、好ましう人に知られなどしたる人は、おろ

かなりと思はずもてなさずかし。(二二四段「はづかしきもの」)

これは、「はづかしきもの」という段の中で用いられている。男性が女性に「おろかなり」と愛情を疑わせるようなことはしない、という文脈で用いられている。この「おろかなり」は、「愛情が薄い」ということ、つまりそのもとは「いいかげんだ」という意味である。

64 御返りうけたまはりて、御輿のもとにて奏し給ふほど、言ふもおろかなり。(二二八段「八幡の行幸」)

これは、宣旨の使い齋信の宰相の中將が女院の返事をうけたまわり、天皇に奏上する場面である。はれがましく、すばらしい姿について用いられている。「言ふもおろかなり」は、慣用表現で、「すばらしい」ことを強調している。

65 なおただ人にてだにをかしかべし。まいておろかなるべき事にぞあらぬや。(二七七段「御前にて」)

これは、中宮が、作者の発言を覚えていて、贈り物をしてくれたことに対して用いられている。自分が言ったことを覚えていることは、普通の人でもうれしいものだが、それが中宮なら、うれしいなんてものではない、というのである。「おろかなるべき事にぞあらぬや」は、賞賛の表現であり、したがって「おろかなる」は否定的な意味、「いいかげん」として使われている。

66 此の君ののたまひたらんだにをかしかべきに、まして、仰言

のさまはおろかならぬ心地すれば、(三〇一段)「三月ばかり物忌しにとて」

これは、宮中を離れていた作者に対し、中宮の女房で、作者の同僚の宰相の君が「はやく参上してほしい」という言葉に加えて、中宮の「おまえがいなくてさびしい」というお言葉について評価した部分である。「をかし」よりもさらに上位のほめ言葉として「おろかならぬ」は、用いられている。「普通でない」という意味に通ずるが、賞賛の表現である。したがって、「おろかなら」は否定的な意味、「いいかげん」としてつかわれているのである。

「おろか」は11例で、「おろかならず」は1例のみ存在する。「おろか」それ自体は「いいかげん」の意味で用いられているようで、「普通」の意とは掛け離れている。また、男女の間柄に対し、「愛情が薄い」としても使われているようだ。多いのは、「言ふもおろかなり」という「言うまでもない」の意味の慣用表現である。したがって本稿で取り上げた他のどの語よりも個性的で、強い意味をもっている。そこで、「おろかならず」は「普通でない」と訳しても、他のどれよりも強い表現かつ、善を意味する言葉として用いられるようである。

七 終わりに

「普通」また「普通でない」意味に関わる言葉を見てきたが、「例」が、もっとも一般的な「普通」であり、そして、「例ならず」

として、もっとも一般的な「普通でない」を意味するのである。

「なのめ」は、作者にとつて、あまり使い慣れた言葉ではないようだ。「いいかげん」な気持ちが根底にあり、「普通でない」としては用いられていない。ただし、もしも「なのめならず」として使われたならば、方向としては「例ならず」よりも善の方向で用いられたであろう。それだけ「例」よりも「なのめ」は悪の意味合いが強い。

「なべて」は「世間一般」といった意味で使われることが強い。そして「なのめ」同様、「なべてならず」としては使われない。しかも、「なべてならず」として用いられれば、「世間一般と異なる」というニュアンスであったであろう。

「ただ」は形容動詞なのだが、「例」に非常に近く使用されている。ただ本質的には「何もない」という意味であるように思われる。だから「ただならず」というと「例ならず」よりも「普通でない」度合いが強い。

「おろか」は以上のどの語よりも個性的かつ強い言葉である。「言ふもおろかなり」という慣用表現として使われることが多いことも特徴である。「いいかげん」な意味を本質とすると思われる点は「なのめ」と似ている。「おろかならず」の場合、「普通でない」意味に関連する表現としては、もっとも善で、かつ賞賛に近い。

したがって、「普通でない」を意味する表現を位置づけると、次のようになる。

例ならず ごく一般的な「普通でない」の表現。善・悪・程度、あらゆる対象に用いられる。

悪の傾向が強いと思われる。
「おろかならず」はもつとも強い。そして、賞賛の言葉として用いられる。

(本学 教授)

>
(なべてならず)「例ならず」よりもやや強い。善・悪・程度と用いられるであろう。

>
(なのめならず)「例ならず」「なべてならず」よりも強く、「ただならず」に近い。善として用いられる傾向であろう。

>
ただならず 意味的には「例ならず」に近く、強く「普通でない」を意味する。やや悪の傾向である。

>
おろかならず もつとも強い。善の傾向が強い

「例ならず」がごく一般的な「普通でない」の意味である。作者は、気楽に、何げなく用いている。言葉を吟味しなければ、「普通でない」はこの「例ならず」を使えばよいのである。

「なべてならず」と「なのめならず」は、存在しないので、存在したものとして、考えて見た。「なべてならず」は、「例ならず」を、やや強めた文脈で使われ、「なのめならず」は、さらに強く、「ただならず」に近い。ただし、「なのめならず」は善、「ただならず」は